



神津カンナ氏 プロフィール

作曲家の神津善行氏、俳優の中村メイコ氏の長女として東京に生まれる。1977年3月、東洋英和女学院高等部を卒業後渡米し演劇を学ぶ。著書『親離れするとき読む本』は、体験的家族論として注目され、ベストセラーとなる。以後、執筆活動の他テレビ・ラジオ出演、講演また、公的機関や民間団体の審議委員等も数多く務めている。



神津カンナ氏 講演会

「思慮深いまなざしを育むために」

9月17日、柳井市のベルゼにおいて、エネルギー講演会が開催されました。講師は作家の神津カンナ氏。同氏は地球環境やエネルギー、電力事情などにも詳しく、これらの問題を考える視点の置き方についてお話されました。

私の原点となった父の言葉

私は長年エネルギー関係の仕事に携わってきたが、3・11の震災以降、これまでの言動を振り返り、「本当に良かったのだろうか」と悩んだことがある。その時に思い出したのが父の言葉だった。

父に突然「上はどっちだ？」と聞かれ、当たり前のように頭上を指したら「お前は相変わらず視野が狭い。丸い地球で考えた時、日本とブラジルでは、同じ上を指しても、その方向は違ってしまう。もっと多角的な視点で考えることは出来ないのか」と。

この話のキーワードは「いろいろな角度から見ると、そして『当たり前だ』と思ひ込み過ぎない」ということだ。皆が同じように考えていることでも、角度を変えると色々なものが見えてくる。だから、エネルギー問題も別の角度から見てもいいのではないかと考えるようになった。

変わることは当たり前

今、日本のエネルギー自給率は約5%だと言われている。しかし、過去を振り返ってみると、自給率は絶えず変化している。

例えば私が生まれた時代の1960年頃、自給率は60%くらいだった。その当時は国内炭が採れていて石炭火力が主流だったからだ。その後、国内炭が枯渇し石油が急激に増えてくる。さらにオイルショック以降は、石油が減って原子力が増えてくる。つまり、日本はその時代時代の状況に合

いろいろな角度でものを見る

また、「いろいろな違いを認識すること」も大切だと思う。

例えば、灯油を一番多く使うのは北海道だ。都会に住んでいるとその重要性には気付きにくい。北海道の人たちにとっては灯油やガソリンの値上がりは命にかかわる深刻な問題だ。東京の人と北海道の人の、石油の値段に対する感覚は違うということ。

つまり、新聞やテレビだけではなく、日頃からいろいろな方法で情報を手しようという心がけていなければ、自分たちの感覚だけで判断してしまっ見逃す情報もある。

中には、報道する側が意図的に情報の一部を切り取って伝える場合もある。



せたエネルギー比率を考え続けてきたということだ。「変わる」ことが当たり前だという感覚は大切だと思う。私が生業としてしている言葉の世界も変わってきている。日本語が万葉集や古今和歌集の頃のままなら、辞書を片手に解読しなければならぬくらい、今の言葉は変化しているのだから。

情報を読み解く場合、書いてある内容を理解した上で、もう一度調べてみる慎重さが必要だと思う。

ゼロの感覚

もう一つ面白いと思っていることは、私たちの感覚。実は間違っていることなのだが、何となく正しいと信じていることがたくさんある。

日本人は「ゼロ」とか「無」が大好き。「無」は、例えば「無農薬」「無添加」「無香料」など。逆に「有」でいいなと思っているのは「有機野菜」くらいか。「ゼロ」も同じで、「カロリーゼロ」「アルコールゼロ」「糖質ゼロ」など。ところが「ゼロ」が好きになると、

だんだん数値に対するリテラシー（理解力・読解力）がなくなってくる。何でも「ゼロ」や「無」が良いことだと思ひ込んでしまい、0・1と1の違いがわからなくなる。つまり0・1も1も同じ「有」に分類してしまい「ゼロではないから悪い」という感覚になってしまうのだ。ある数値が、全体の中でどういう意味を持っているかを理解する能力が衰えてくるのではないか。

放射線のリスク

例えば、あるとき新聞に「ワラビに発ガン性物質」という見出しが出ていた。数値の理解力が乏しいと、単純に「ワラビを食べるとガンになる」と思ってしまう。専門家の先生に聞いてみると「ワラビの中の発ガン性物質は茹でるとあらかた抜ける」と言われた。ワラビをアク抜きせずに食べる人はほとんどいない。つまり、アク抜きする段階でほぼなくなってしまうということ。念のためにとれくらい食べると危険かと聞いてみたら、「軽トラック1杯分のワラビを60日くらい続けて食べると0・数%発ガン率がアップする」という答え。これは仮にガンになりたくても、そもそもが無理なレベルなのだ。つまり、数値のリテラシーとはそういうこと。「ゼロ」や「無」はわかりやすいようだが、それにこだわり過ぎると正しい判断ができなくなる。

放射線についても同じ。世界の自然放射線の平均値は2・4 mSv（ミリシーベルト）、日本は2・04 mSvと世界平均より低いものの、人工放射線の被曝量はかなり多い。これは医療被曝が多いためで、検査での被曝はなんと世界の約6倍に上る。でも、日本は世界有数の長寿国である。医療被曝が6倍でも病を早期発見

(表面よりつづき)

することで寿命が延びているのだ。このように暮しの中で「何となく決めつけているもの」が、実はそうではないことがある。だから、私たちは時々それを検証してみる必要がある。

安心は技術・仕組みの積み重ね

「何となく不安」「何となく安全」の例をいくつかお話ししたい。

先日、JRの関係者に「なぜ新幹線はシートベルトをしなくて良いのか」と聞いた。その理由をいろいろ説明してもらったが、今ひとつピンとこない。新幹線でも怖いことを想定することはできる。結局、乗っていて恐怖を感じないという安心感を、誰もが持っているからなのだろうと思った。

人は何かが起るとそれを教訓にして技術を高め、より安心できる仕組みを作っていく。それを何度も繰り返して、幾重もの層をバウムクーヘンのように積み重ねることで安心感を高めていく。



新幹線が安心なのは、これまでの安全に対する技術の積み重ねで醸成された安心感。飛行機はまだそこまで行き着いていないかもしれないが同じようなことが言える。そういう意味で、原子力は今が正念場ではないだろうか。事故を教訓として安全対策という層を積み重ねている途上なのだ。

日本は自然の脅威が大きい国。地震や津波がいつ来るかもわからない。火山もある。それらの脅威に対して技術や仕組みの面での対策を積み重ねていって、原子力は安全だと思えるようになるのか、それとも思えないのか、それが今、事業者と国の肩にかかっていると思う。

国のエネルギー基本計画では、40年経過した原子力発電所は止めることになっている。そういう意味では、島根原子力発電所の3号機は最も新しく安全性の高い発電所。さらにその後の上関原子力発電所は、より新しく安全なプラントになるのではないか。

幻想ではなく理想を描く

最後に福沢諭吉の『文明論の概略』という本の中にある言葉を紹介したい。文明の定義という部分にある「いにしえを慕わず、今を足れりとせず、小安に安ぜずして未来の大成を図り、進みて退かず、達して止まらず」という言葉。

文明は人間の欲望が生んだものだから、それに首を絞められることもある。しかし、私たちの進歩は「もつと豊かに」「もつと便利に」「もつと豊かに」と思っていたがゆえの産物。進歩し続けることに苦しさは伴うが昔には戻れない。福沢先生の「進みて退かず」とは、実は「進みて

退けず」なのだと思う。

それならいかに「未来の大成を図る」かを考えるのが人間の知恵。それ以外に、私たちの暮らしを前に進めることはできないと思う。

「今を足れりとせず」とは、今置かれた状況を「これでいいや」と思わないでということ。そして絶えず「未来の大成を図る」気持ちを持ち続ける。そんなひたすら前を見て歩き続ける以外方法がないのではないかと私は思っている。

もう一つ、未来を描く時は「幻想」ではなく「理想」を描くべきだと思っている。「幻想」は読んで字のごとく「まぼろしを想う」こと。「理想」は「ことわりを想う」こと。私たちは時々それらを混同してしまい、絵に書いたモチのような「幻」を思い描いてしまう。もう少し冷静に、切り取られた情報だけに左右されず、理想を描く作業をしなければならぬ。

私も長らく、白馬に乗った王子様が迎えに来てくれると思っていたが、いろいろな角度から見ると「これは幻想だ」と、50才を過ぎて気がついた。(笑)

自分なりの判断基準を

私は、エネルギー問題だけではなく、全ての事に対してのものが見方が大切だと思っている。さまざまな情報を違う角度から見ると、時には別の視点からの見方をする人からも話を聞くように心がけている。

私たちは、これからもいろいろな選択の場面に向き合うだろう。その時のために自分なりの判断基準をしっかりと持っていたい。

私自身もそう思っていることをお話しして、本日の講演を終わりにします。ありがとうございました。

10月26日“原子力の日”にあたって

東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故から3年が過ぎました。現在、日本の全ての原子力発電所が停止しています。原子力が利用できないことにより、石油や天然ガスなどの化石燃料の輸入量が増え、年間3・6兆円もの国富が海外に流出し、日本経済は大きなダメージを受けています。

こうした状況を受け、この春に閣議決定されたエネルギー基本計画や、最近注目を集めている川内原子力発電所の再稼働など、原子力を取り巻く情勢は、現実的で冷静な方向性になってきたようです。資源の少ない日本では、価格が安定的であり、二酸化炭素の排出が少ない原子力発電が、将来にわたって重要な電源であることに変わりありません。上関原子力発電所も、近い将来ますます重要になってくると思われまます。

現在、上関原子力発電所の準備工事が中断されていることは、福島第一原子力発電所の事故やエネルギー政策の検討状況などを踏まえると、やむを得ない面があるのは確かです。しかし、中断している今この時を何もせず立ち止まっているだけではなく、「改めて日本のおかれた現状や放射線についての勉強をしっかりとする好機と考えたい」とそんな思いで、青壮協メンバーを中心に自己研鑽しながら、町内での理解・啓発活動を積極的に進めているところです。

周知のとおり、上関町では人口流出や少子高齢化に歯止めがかからず、早急な対応が必要です。今年6月に温泉施設「鳩子の湯」が30万人の入場者を記録し、道の駅「上関海峡」もまもなくオープンするなど、賑わいをもたらしてくれる明るい話題もあります。こうしたプラス材料を最大限に活用し、将来をしっかりと見据えて「活力ある豊かな町づくり」を目指すということは、誰もが認めるところです。ふるさと上関町を確実に次の世代へと引き継ぐためにも、今こそ様々な立場を乗り越え、町全体が一丸となって盛り上げていくべきです！

上関町まちづくり連絡協議会事務局

“原子力の日”エネルギー講演会

「これからの日本の原子力発電とエネルギー政策」

講師：秋庭悦子氏

NPO法人 あすかエネルギーフォーラム理事長
前内閣府原子力委員会委員
一般社団法人 日本原子力産業協会理事

日時／平成26年10月26日(日)
14:00~15:30

場所／上関町中央公民館 1階講堂
(参加費無料)

主催／上関町青壮年連絡協議会
後援／一般社団法人 日本原子力産業協会
上関町まちづくり連絡協議会



●今回、神津カンナさんの講演を聞いて、情報は切り取られたり、意図的に作られたりしていることを改めて認識できました。間違った情報を見抜く力と、自分なりの判断基準を作ることが大切だと感じました。

●町内には今も推進、反対の対立はあります。しかしお互いの主張の根拠が、意図的に操作された誤った情報では、すれ違いしか生まれません。また、対立だけでは何も生まれません。正しい情報を取り入れ、皆で協力して、町づくりを進めていきたいと思います。(K)

後記